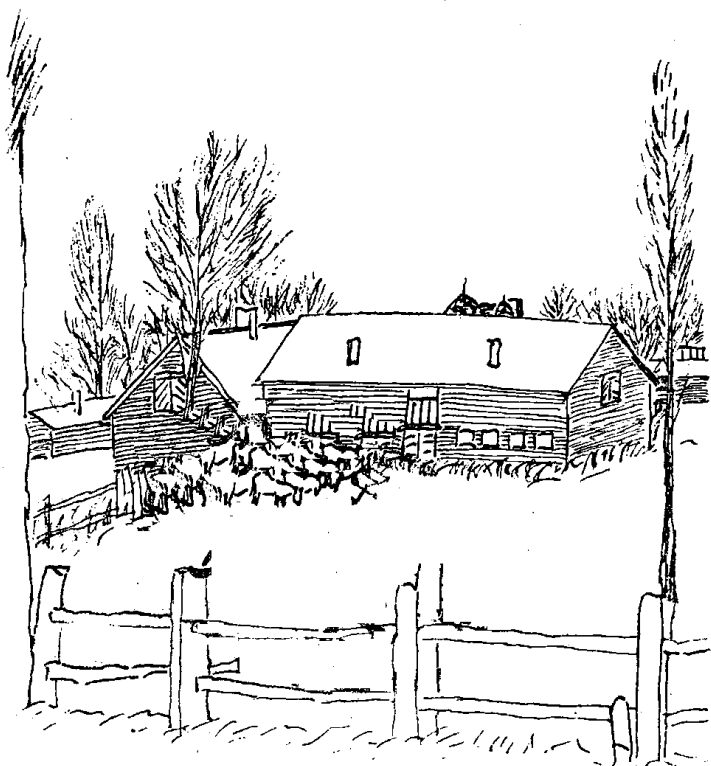




ふるさと陸奥

森田左太夫



宮文竹版

ふるさと隨筆



昭和30年11月1日 第1刷発行

定價 320圓

著 者

森 田 た ま

発行者

株式会社寶文館
(代表) 高橋長夫

印刷者

井 澤 廣 夫

杜陵印刷・大光堂製本

発行所

東京都千代田区神田錦町3-20

株式会社 寶文館

振替東京280. 電(29)8746

目次

ふるさとの花

灯

君が代

パイナップル

ふるさとの花

ハムレット

生きてゐる母

たらんべ

17

三五

四七

六六

七三

精進料理	七五
女と夏	八〇
海のかなたの夕涼み	八二
うちのはの話	八五
ふるさとの秋	九〇
わたしのきもの	九四
新年おめでたう	九六
松の壽	九八
七草や	一〇三
手習ひ	一〇六
雪の札幌	一〇九
お化け	一二六

昔ばなし	一六
ふるさと紀行	二〇
生きてゐる母	二三
夏日新涼	二五
空飛ぶ円盤	二八
私と新聞	三〇
世界につながる美しさ	三二
俳句小品十二ヶ月	
一月	三六
二月	三八
三月	四〇

四月	一〇一
五月	一一三
六月	一二三
七月	一三四
八月	一四五
九月	一五五
十月	一六七
十一月	一七八
十二月	二六九
あとがき	

ふるさこの花

灯

大川端から山の手へむかつて自動車をはしらせてゐると、神田あたりであつたらうか、ひじやうに灯の美しい町があつた。すずらん通りと書いてあつて、せまい小路の兩側に、紅、青、白、三つの灯が、軒よりも低いかと思はれるほどの高さにつらなつてゐて、くらゐ夜空の下に、まるで海底の寶石のやうにきらめいてゐた。霧のかかつた夜だったので、その灯はすこしうるんで、一そう華やかにみえた。

「きれいですねえ。……」

とおもはず口にだすと、

「はあ、すずらん通りもすつかりきれいになりました」

と、隣の人がすぐ答へた。若い人だから、そのへんの地理もよく知つてゐるのであら

う。私は不意に漱石の「彼岸過ぎまで」を思ひ出した。神田の神保町だったかどこだったかで、叔父の松本と姪の、——千代子だったかしら、その二人の待合せるところが鮮やかに浮んできた。その頃の神田の灯が浮んできた。北海道の田舎から出てきた自分にとつては、神田あたりの灯は相當賑やかに感じられたが、しかしいまのやうな、レビューの踊子のかんざしのやうなきらきらしたものは、天地の差がある。

すずらん通りといふ町の名前は、日本ぢゆうどこへいつてもあるやうな氣がする。東京の中でも、二つか三つあつたやうに思ふ。すずらんは自分の生れた北海道の野に咲く花だから、すずらん通りといふ名前には、自然に氣をつけるくせがついてゐる。大ていのばあひ、すずらん通りは兩側から、すずらんの柄の形をした、尖頭のくの字形にまがつた鐵棒が、さしかけのやうに出てゐて、その鐵棒に乳白色のまるい珠が、三つか五つぶらさがつてゐるといふのが定式で、町によつて、その球が大きかつたり、ちひさかつたり、あるひは數が多かつたり、すくなかつたりする程度の相違であつた。どこまでも、すずらんの形と色は守つてゐたわけだが、今夜見たすずらん通りは、まるでちがふ。

すずらんの色は白以外何もないので、女學生のころ、何でも變つた事をやつてみたい友だちが、紅インクの中にさしておいたら、すずらんの花が紅くなつたといふ實驗をした事

があつた。しかし全部が紅くなつたわけではない。花の中のすちだけが紅くなつたので、つまり、白い花びらに紅いしまが通つただけである。私はその話をきいて、俗悪な試みだと眉をしかめた。

神田のすずらん通りもそれに似て、紅や青のネオンサイン、すずらんの花の形もない。去年までの私だつたら、なんて騒がしい光だらうと目をそむけたにちがひない。だが今夜は、——きれいですねえと云つたのである。

このあひだ、私は頼まれて九州へ講演旅行にいつたが、そのかへり、伊丹で飛行機を下りて、京都で二日ほど遊ばせてもらつた。板付を四時にたつて、伊丹へ六時に着くはずの飛行機が、どういふわけか二時間遅れて、板付を六時出發、伊丹へ八時に着くこととなつた。おかげで實におもひがけなく、大阪の夜景を空からながめる幸運に恵まれたのである。

かねかね、東京の夜景は世界一の美しさで、空から飛んでくる人たちのあこがれの的であると聞かされてゐたけれど、どんな風に美しいのか、見たことのないものには想像がつ

かない。ヨーロッパ諸國の都會は、町のショー・ウインドウに夜ぢゆうかうかうとあかりがついてゐて、人通りの絶えた深夜でも、町の表通りだけは生きてゐるやうに明るかつたが、その明るさは大きなビルディングにさへぎられて、空まではとどかなかつたやうである。

空の旅の一ばん最初に着いた都會はパリであつた。羽田をたつて二日目の夜である。私は期待に胸をふくらませてゐたけれども、これがパリかと、空の上からながめた町は、地の底に深く沈んだやうで、灯のいろも暗かつた。パリは暗い町だと思つた。

だが、飛行場を出て、しばらく經つと、自動車はパリの町にはいつたらしく、緑の雫のしたたるやうな並樹道にさしかかつた。雨のあとだつたのかもしれない。しかしその並樹の緑は、ガス燈に照らされてゐるやうに、しつとりと濡れた感じがした。さうして、ところどころ町角などに張出した、眞紅のテントと實に美しい對照をしてゐた。テントはキャフェの日除けで、ひるまはそこに輕いすと卓をならべ、お茶を飲ませるところだとやがて知つた。

パリは土曜、日曜に町の照明といふのをやる。公園とか、噴水とか、凱旋門とか、さういふところに強い光をあてて、闇の中からばつと龍宮が浮きあがつたやうに明るくする。

ロンドン、ベルギーのブラッセル、ウキーン、デンマークのコペンハーゲンなどでは、平日でも夜の照明があつた。コペンハーゲンの噴水には、紫とオレンジとうすく色がついてゐたりした。だがこの地上の明るさは、どこの國でも空まで届かない。

板付から出た飛行機が大阪へ近づくとともに、私の眼の下に展開されてきたのは、神戸から阪神一帯、さうして大阪、この廣い地域が、まるで寶石箱をひっくり返したやうに、一面にきらきらと光でちりばめられた壯觀だつた。光はダイヤモンドの白に、ルビーの紅、エメラルドの緑もちらちら交つて、空の星よりも美しい。——すずらん通りのネオンサインに、おもはず、きれいですねえといった私のあたまには、空から見る効果の方が先き立つてゐたらしい。地上のネオンサインはやはり刺激が強すぎる。

外國へいつても自分などは、言葉がわかるわけでなし、洋装をするのでもなし、西洋料理はむかしから好きなのだし、日常生活に、あらためて影響を受けることはなさうにおもはれた。たとへば、いままで坐つて暮してゐたのが、急にいすの生活になるとか、髪をちよん切つてパーマメントをかけるとかいふ風な。……

歸つてきてすぐ、友だちの會に出席したら、あなたはちつとも變つてゐないわね、六ヶ月もヨーロッパを歩いてきたなんてうそのやうな氣がするといはれ、變つてゐないことが相すまないやうな、ちよつと妙な心地がした。映畫「ローマの休日」で、日本の若い人に馴染の深いローマのイスパニヤ廣小路の石段々、女王がアイスクリームをかじりながらのぼつていつたあの段々の、兩側に石のてすりがあつて、その手すりにいい若い者たちが朝の十一時といふのに、のんびりと腰かけてゐて、私が上のホテルから下りていくと、ボンジョルノ・マダラム、グッド・モーニング・マダムと、いとも親しげに聲をかけてくれる。アンデルセンの「即興詩人」の時代は、そこは乞食の王座で、エスパニヤいしだんの王と呼ばれたペッポ叔父が、毎日出御するところであつた。ムッソリーニの時代に、ローマの乞食は一切驅逐されて、——この、乞食を驅逐しただけでも、ムッソリーニは偉大だといはれてゐる、——旅行者はだれからもねだられることなく、安心してこの石段を上り下りできるやうになつたのだが、こんにちでは乞食のかはりに、若い者たちが、手すりから足をぶらぶらさせて、ボンジョルノといふ。ついこちらも、ボンジョルノとあいさつを返したくなるほど、和やかである。

戦争に敗けたのは、イタリアも日本もおなじだけれど、日本のどこに、そんなのんびり

した場所があるだらうか。日本人は蟻のやうに勤勉で、いつも、せかせかと働いてゐなくては氣がすまないらしく、そのくせローマの停車場のやうな、世界一といはれる見事な驛などは、いつまでかかつても出来さうにはない。日本人はせつがちで、外國へいつてきたら、すぐ何か、あちら風を取り入れたものを發表しなくては、時世おくれとおもふらしい。ヨーロッパはすばらしいと讚美しなくては、行つた甲斐がないらしい。

だが、どんな人間でも、はじめての國へいつてくれば、どこかに、その影響は受けてゐるので、頑固だと評された自分でも、やはり知らないうちに、日常茶飯事に、感じかたのちがつてきてゐることはある。刺激のつよいネオン・サインの紅やみどりを、きれいですねえといふやうになつたのも、その一つで、進歩か退歩かわからないが、寛容になつただけはたしかである。

ヨーロッパへ行く時、お餞別に、むかうへ着いてからのお土産をくれた人があつた。まつしろな絹のハンカチーフに、紅やみどりやピンクの絹糸で、鳥居だの、櫻だの、紅葉だのをぬひとりのしたもので、その幼稚な色彩が私には恥かしくおもはれた。これが日本のも

のですと、人前に出したら冷汗がながれるだらうと思つた。

パリに着いて十日ほどゐるうちに、すこしづつ私の考へはかはつてきた。世界流行の發祥地であるパリの女の人の色の好みが、日本人よりそれほどすぐれてゐると思はれなくなつてきたのである。私の泊つてゐたのは山の手の閑靜なホテルであつたが、すぐ横手には、かなり上等のものを賣つてゐる通りがあつた。ホテルのむかひは六階建てのアパートで、窓が三十六あつた。一階の入口の左側の部屋は、管理人が住んでゐるのかとおもはれたが、そこから出てくる中年の女の方は、うすいブルーにオールドローズのしまを裾に一本とほした、木綿のワンピースをいつも着てゐて、それはなかなか氣がきいてゐるやうだつたけれど、窓にぶら下げたカーテンは、片つぼがももいろ、片つぼが紅と白のべんけいじまで、どう見ても調和がよいとはいへない。ひどく田舎くさい感じで、見るたびに私は氣になつた。お金がないのかもしれないけれど、どうして片つぼづちがつたカーテンをさげておくのだらう。すこしぐらゐ無理をしても、おなじものにするとか、何とか考へがありさうなものだ、……

私は第一、白と紅のべんけいじまがきらひであつたし、ももいろも閉口である。日本から持つてきた絹ハンカチーフのさくらも、ピンクといふよりもいろに近い。それで人前